

# 中国

## 私の青春の地、北京 —敗戦そして戦後—

神奈川県 畑 中 常 子

### 一 私の生い立ち

私は、旧姓を佐々木常子と申します。大正十三（一九二四）年三月十九日に、現在の東京都中央区入船町で、父佐々木村次、母トメの次女としてこの世に生を受けました。長女千代とは十七歳、長男政雄とは、十三歳の年齢差があります。兄との間にいた次男が生後二歳で亡くなっていたため、両親にとって久しぶりの子供なのでたいそう喜び、あの関東大震災からまだ半年しか経っておらず、

物が不足がちの中でも、絹の着物に包まれて大事に育てられたそうです。

親戚からは、まるで「お蚕様だね」と言われていたそうです。そのせいか、私は体が弱く、「この子は長生きできないのでは」とも言われていたそうです。小学校に通い始めてからも、学校の行事のある前日には、必ずと言っていいほど熱を出したり、また朝礼時に貧血を起こしたりして、保健室にはよくお世話になったものです。

両親共、現在の新潟県佐渡市佐和田町の出身なので、私は子供のころには、先祖は罪人で金山堀りをさせられていたのではないかと思ひ、恥ずかしくなって思ひ悩んでいたこともありましたが、考えてみれば金山堀りには子孫がいるわけがあり

ません。後年歴史好きな兄が調べてくれて、佐々木家は朝廷と一緒に流された公家の末裔であり、佐々木一族はしつかりとした家系であると知り、ほっとしました。父の何代か前までは、宮大工をしていたことも分かりました。

父は新潟で和菓子店を営んでいて、当時としては早くからパン焼き釜を導入したりもしていましたが、東京に出てもっと技術を磨くため、大正の中ごろに上京し、今もある銀座風月堂に勤めていました。

大正十二年九月一日の関東大震災のときには、私は母のお腹の中にといたため、原体験としての震災は体験しており、いまだに地震が怖いのはそのせいだろうと思っています。震災時は、父と姉は仕事に行っていました。後で合流することができました。兄は新学期が始まった日で中学からちようど帰って来て、母と昼食をとろうとしていたときで、炊き立てのご飯が入ったお櫃ひつを抱えて逃げ出したそうです。

晩年母がよく申しおりましたが、あのようなきときにはすぐ食べられる物を持って逃げるのが大切だとも、家族はばらばらになることがなかったのは幸運だったとも、よく言っておりました。

家族は、東京駅近くの現在の山手線のガード下に避難したそうです。そこは、有名な食料品の製造・販売の老舗、明治屋の倉庫だったそうで、母はそこでアスパラガスの缶詰やコンビーフの缶詰を初めて食べて、そのおいしさが気に入ってしまい、晩年まで好んでよく食べていました。焼野原となってしまった下町では、食べるものが少なく皆が困っていたので、父は自分の得意な技術を活かし、長男と揚げ饅頭を作って売ったそうです。かなり評判になったそうです。後年、兄が特許でも取っておけばよかったと、冗談交じりに言っていました。兄はその後、建築関係の学校に進みました。父は頑固でしたが曲がったことが嫌いで、ご近所の人にはとても優しく、震災後いち早く都市ガスを敷き込んだ我が家は、昼間から風呂を沸

かしては、ご近所の人を入浴させてあげたりしていましたが、多少は無理やりだったかもしれないかもしれません。そのように、おせっかいなところが大分ありました。そのせいでしょうか、私は近所の方からも随分とかわいがられ、私のお茶碗と箸が隣近所の数軒に置いてあるほどでした。末娘の私にはとても優しい父で、怒られた記憶はほとんどありません。

また、姉が二十歳の若さで嫁いでいたので、私とは三歳違いの甥と、五歳違いの姪がいて、不思議な感じがしていました。兄は、建築の学校が終るころに応召されて、工兵として満州に行っておりました。我が家は特別に裕福な家庭ではなく普通の家庭でしたが、私はまるで一人っ子のように何不自由なく甘やかされて育ちました。

築地の明石小学校に入学以来、多くの友人にも恵まれ、七十年余り経った今でも仲良くしている親友がたくさんいます。また、小学校での担任の先生は、女子師範を卒業してすぐに明石小学校に

赴任し、私たち四年生の担任になったので、年齢が十二歳くらいしか離れていないので、年をとられてもお元気でしたので、十年くらい前までは先生を囲んでのクラス会を開いておりました。旧制の女学校に進んでからは、小学校で一緒だった親友に加えて、新しい友人も多くでき、卒業するまで楽しい女学校生活を送ることができました。昭和十六（一九四一）年に女学校を卒業するまで、この地入船町で過ごしていました。

## 二 北京への転居

昭和十五年の夏休みに、母と急に北京へ旅行をすることになりました。と言いますのは、私の女学校卒業を翌年に控えたこの年に、十三歳年上の兄が、北京で徴兵解除になっていて、北京を離れることなく、満鉄の子会社である華北交通株式会社に入社し結婚もして、良い暮らしができていますからと、両親と私を呼び寄せたいとの気持ちから、下見のつもりで来ないかという兄からの手紙が届いたためでした。私の記憶では、当時、パスポー

トのようなものが必要だったのかどうかは知りませんが、確か警察の許可のようなものをもらって、北京へ行くことができました。

東京駅から下関駅まで列車で行き、下関と釜山の間は連絡船で、そして釜山から北京間はまた列車でした。当時、世界でも最高のレベルにあった「特急亜細亜号」での三泊四日の大旅行でした。満州に沈む大きく赤い夕陽を初めて見たとき、その美しさに驚くと同時に、何もない大地にその赤い夕日が沈むのを見て、何か物悲しさを感じました。

夏休みの旅行として北京へ行って来たので、帰って来たらから全校生徒を前にして報告会をさせられ、雄大な広野や紫禁城、万里の長城、中華料理等々、初めての北京の印象と、来年には一家で北京に引っ越すことになることを、一時間近くにわたって話をしました。親友の中には、行かないでと泣いて懇願する人もいて、とても複雑な気持ちにさせられました。また、家庭的に恵まれていな

かったある親友は、一緒に北京へ連れて行って頼みに来ました。しかしこれはできない相談なので、つらかったのですがお断りしました。今でこそ簡単に海外旅行ができますが、当時としては大変な旅行であったことは事実です。私も親友たちと離れ離れになることはとても寂しく思いましたが、一度下見を済ませていることですし、両親や兄弟夫婦と一緒に住むことができるので、その点は安心しておりました。

翌年いよいよ女学校を卒業し、家族で北京に行く日がきました。東京駅に着いたら、クラスの友達が大勢見送りに来てくれていて、思わず今生の別れかのように大声で泣いてしまいました。名残り惜しく、列車に乗ってから窓を開け、手を握り合っていました。やがて発車した列車と並んでホームの端まで走り、いつまでもいつまでも泣きながら手を振って見送ってくれた親友たちの姿、今でもそのときの情景をはっきり記憶しています。

### 三 北京での生活と華北交通への入社

列車、船、そしてまた列車と乗り継ぎ、三泊四日の道のりでようやく北京に到着したときには、両親はかなり疲れていました。兄夫婦に出迎えられて、新しく住む家に向かいました。そこは昨年下見に来たときの家よりも大きく門構えも立派な一軒家で、ボーイとメイドがいました。そこは、北京市外四区半裁胡同にあった華北交通の社宅でした。両親家族と一緒に住むからといって、広い家にももらったようでした。住み心地も良く応接間があり、そこには欧州風の応接セットと暖炉が備わっていて、床には天津緞通が敷き込まれていて、北京の寒さの中でも薄着でいられるほど住み良かったです。また夏は暑いことは暑いのですが、日本のように湿度が高くじめじめしていませんが、家の中に入れば涼しく快適に過ごせる気候でした。特に秋の空は澄んできれいでした。その空を飛んでいる鳩の足についての鳩笛の音を聞いたものです。

私は女学校を出たので、何も資格を持っていな

かったもので、北京にある和文タイプの学校に通っていました。全期が終了する前に、兄が勤めていた華北交通の入社試験を受け、和文タイピストとして合格したので、すぐに入社しました。タイピストプールと称する本社総務部の浄書室に勤務しましたが、そこはまさに「女の園」でした。当時、その浄書室のトップにおられた方は高橋キミさんとおっしゃる方で、国際連盟脱退時の外務大臣松岡洋右氏が、満鉄総裁のとき、秘書としてヨーロッパまで同行した才女で、大変に厳しい方でした。友人の中には、高橋さんに怒られて泣いた人や、会社を辞めたいとさえ言い出した人がたくさんいたようですが、私は高橋さんのみならず幹部や先輩から不思議とかわいがされていました。仕事はもちろんのこと、毎日の生活も楽しく過ごせました。しかし、私は生来負けず嫌いの性格なので、タイピストの仕事には熱意をもって打ち込みました。タイピストの技能大会では二位を取るまでにはなりませんが、どうしても一位の方を抜

くことができず、悔しくて仕方ありませんでした。その一位だった先輩は松屋幸子さんとおっしゃる方で、私をとてかわいがって下さったり、今でも下関でお元気にしておられますが、私が尊敬し敬愛する先輩の一人です。また、会社には袁世凱の孫にあたる女性社員がおられて仲良しになり、お互いの家へ行き来したり、街角で売っているピーナッツを買い、歩きながら食べることも教えてもらったことを今でも懐かしく思い出します。今、どこでどうしておられるのか、会えるものならまた会いたいと思っています。

また、会社で行っていた中国語の通訳の試験を受け、二級を取りました。当時としては、人口の多い中国人に日本語教育をするよりは、日本人が中国語を話せるように勉強するほうが早かったのだでしょう。余談になりますが、この習った中国語を、戦後もずっと使うことはなく、ほとんど忘れていました。横浜に転居して来てから中華街へ食事に行く機会が増えてきて、あるとき息子と昼食

に行ったとき、いつもの店でなく、小さな店でもおいしい所があるはずだからと探して入ったところ、日本語がたどたどしいお婆さんが注文を取りに来ました。息子は困ったような顔をしていましたが、私は昔とった杵柄で、中国語で注文ができました。そのお婆さんはいそがしく喜んで、私たちが食事をしている間中そばから離れず、ときどき話しかけてきました。戦後三十年以上経っていましたが、北京の言葉だったのでどうにか通じました。他の地域の言葉で全く分からなかつたらと思うと、冷や汗ものでした。英語を少し話す息子が、「へー！ なかなかやるね」と感心してくれました。以前から子供には北京で二級通訳の資格を取ったと言っていましたので、これで親の面目を保つことができました。

東京のど真ん中、中央区、銀座にもほど近い入船町で生まれて育ち、当時としては十分に都会の空気、生活を知っているものと自負していたもの

の、北京に来て中国の文化のみならず、日本にはいまだ入っていなかった欧米の文化にも触れることができたことは、とても有意義で楽しく、お洒落にも精を出し、コティーの香水や化粧品、多分今のバリーだと思えますが、革製品を給料を貯めては買うのが楽しみでした。また、アメリカ映画の「風と共に去りぬ」を昭和十六年に総天然色（カラー）で見えて感激したことを、今でも鮮明に記憶しております。

路面電車を利用して通勤していましたので、初めのころは降りるにも遠慮がちだったり、中国人に邪魔されて降りそこなってしまうこともあったのですが、馴れるに従って中国人をかき分けて図々しく降りる要領も覚ええました。

また両親、兄夫婦と、よくヤンチョ（人力車）を連ねて中華料理を食べに行きました。今、日本で食べる中華料理は、日本人の口に合うようにアレンジしてあります。例えば横浜の中華街でも日本風になっていて、中国の本場の味とは違います。

しかし、以前息子とアメリカ西海岸を旅行したとき、サンフランシスコの中華街で食べた中華料理が、戦前に中国で食べた味と同じでした。香辛料が同じで、とても懐かしく感じられました。そういう経験から中華料理が得意で家でもよく作りますが、家族も喜んでくれます。中国では、料理がおいしいとテーブルの上や床を汚してもいいのだと、兄から聞いていましたが、さすがに今の時代にそのようなことはできないことです。

#### 四 華北交通はやはり国策会社

華北交通には、スケートリンクがありました。そのスケートリンクに、オリンピックのフィギュアスケート選手の稲田悦子さんが、日本国内では練習ができなくなってきたので、北京まで来て練習をしていました。私もその姿に憧れて、早速スケート靴を作り、転びながらも一生懸命練習をして、うまく滑れるようになりました。

また、当時の花形女優の李香蘭さんも何度かお見掛けしました。何のために華北交通に来られた

のかは分かりませんが、偉い方と会われたのでしよう。とてもきれいな方でした。顔立ちは日本人離れしていましたが、私はあの方が日本人であることを聞いて知っていました。中国人の人たちは、あんなにきれいな中国語を話すことができる日本人は絶対にいないと言って信じてくれずに、中国人であると言い張っていました。

#### 五 父の異変

北京に来てしばらくしてから、父の体調に異変が見えてきました。何となく元気がなく、声の張りがなくなってきました。医者に診せたところ、結核を患ってしまったので、北京での仕事は何もしていなかったもので、体の調子が狂っていたこともあったのでしょうか。もともとあまり体が丈夫でなかったところに、北京の空気がとても乾燥しているので、それが拍車をかけてしまったのではないかと言われました。母、兄と相談し、姉がいる東京の大田区に転居させることにしました。姉からは「私に任せなさい」と言ってきました。

で、そうすることになりました。母と私で日本まで送り届けようとしたのですが、頑固な父は「大丈夫だから」と言って、当時、我が家に遊びに来ていた姪（姉の子）に託して帰国させました。東京に戻った後の父は元気を取り戻しましたが、完治することはありませんでした。昭和十八年に亡くなりました。「父危篤」の電報を受け、急いで支度をしていたところに第二報が届き、息を引き取ったことを知りました。父が息を引き取るときに、「あー寒い」と言ったことを後に姉から聞きました。きっと、心は北京に来ていたのかもしれない。それを思うと、今でもとてもつらい気持ちでいっぱいになります。

#### 六 華北交通の親友三人組

華北交通では、同じときに入社した、同年配の人と、「仲良し三人組」になりました。一人は小沢久代（旧姓 塩原）さんです。小沢さんは長野県出身で、早くお父様を亡くされ、交通公社にお勤めだったお母様と北京に來られて、交通公社の



寮に住んでおられました。もう一人は、亡くなられましたが、岡田宮子（旧姓 奥村）さんで、お父様は三菱金属の鉱山技師で、北朝鮮の平壤（ピョンヤン）で生まれ育ち、平壤の女学校を卒業してから北京に来て、華北交通に入り、女子寮の「美和寮」に住んでおられました。箸が転んでもおかしな年ごろでしたので、この二人とはことのほか仲良くしていて、だれが言い出すともなく「仲良し三人組」と称していました。引揚後もずっとお付き合いが続きました。何か運命的なものを、初めから感じていました。会社では毎月タイプのテストがありました。いつも三人で競い合ったものです。また、コーラス部でも一緒でした。当時、北京に進出していた日本の大手企業のコーラス部による発表会が北京飯店であり、私たちが所属していた華北交通のコーラス部が優勝したことがありました。そのときちょうど、あの山田耕筰先生が北京に来ておられていて、この発表会を御覧になり、お褒めのお言葉を頂戴し、さらに先生の指

揮で合唱したことを記憶しています。大変光栄でした。大陸で生活をしたことのある方々は、とても友情が強く仲の良い人が多いと聞いていますが、私たちもそれを身をもって実感しています。

#### 七 敗戦、そして引揚げ

戦況が思わしくなくなってきた昭和二十年三月に、私は東京への出張を命じられました。女性社員では初めてのことでしたが、親族が東京にいる者でないといけないということで、私が選ばれたのです。出張先の届けなければならぬ書類は衣服に縫い込んで、東京まで帰って来ました。社命の用務を済ませて、姉の家に寄り父の墓参りをしましたが、このまま東京にとどまっていた気がしましたが、すぐに北京に戻りました。何か良くない予感がしていましたが、私が戻ったその直後から東京の空襲が始まりました。何となく戦況の悪化は感じていましたが、まだ北京は平和そのもので、まさか日本が負けるとは夢にも思ってもいませんでした。

昭和二十年八月十五日に重大放送があるといわれましたので、家で玉音放送を聞きました。雑音が入ってよく聞こえませんでした。戦争に負けたことはおおよそ分かりました。翌日出勤したら、見たこともない中国の人が私の席に座っていたので、改めて敗戦を実感しました。悔しくて悲しくて、涙を流しながらそのまま家に帰りました。しかし、家で雇っていたボーイやメイドには普段から家族同様の扱いをしていたので、変わりのない態度で接してくれていたのがとても嬉しかったです。かえって私たちの方を、気の毒そうな顔をして見ていました。またいつの日にか会えることを約束して、別れました。

翌日からまた会社に行きましたが、それからは来る日も来る日も書類の焼却に明け暮れる毎日でした。九月に入ると、次第に中国人が多く会社に来るようになりました。遂に、十一月に入ってから、私たち日本人社員は自宅待機を命ぜられて、引揚げの準備に取り掛かることになりました。一人に

許される荷物は、リュックサック一個と両手に持てるだけの荷物でした。引き揚げる多くの人も同じでしょうが、泣く泣く置いてきたものがたくさんありました。

日本人は北京市内の集結所に集められて、そこでしばらく過ごしましたが、年が明けた昭和二十一年になるといよいよ帰国が決まり、塘沽の港に集結しました。塘沽の港は、中国国内からあらゆる苦勞を体験しながら集まって来た多くの人々で埋め尽くされていました。華北交通にいた方々やその家族も多くいましたが、皆深刻な顔をしていて、特に幼児がいる人は、紛れないように幼児を紐で縛って、神経を尖らせていました。

引揚船に乗船するときには荷物検査がありませんでしたが、検査をする中国人女性兵士が時計を下さいと言いました。もし拒否したら、全員が乗船できなくなってしまうというわさが流れたりしたので、みんな持っている時計を全部差し出しました。そうしたら、礼を言ってお腕まくりをして時計をは

めていましたが、見るとその腕には十個以上の腕時計をはめているのが見られました。他にも仕付け糸の付いたままの和服や、一度も締めたことのないような新品の帯をいくつも差し出したりしていました。給料を貯めて買い集めた宝石も、取り上げられてしまいました。引き揚げた多くの人々も同じ経験をされたことと思いますが、私は悔しくて涙が止まりませんでした。

昭和二十一年の春に佐世保港に入港したときには、ちょうど咲いている桜を見て皆で抱き合い手を取り合い、嬉し涙を流しました。これで、本当に日本に帰って来られたのだと。佐世保から列車を乗り継ぎ東京に戻って来た途中の、焼野原を見てはまた涙を流しましたが、明日からの私たちの生活を考えると泣いてなんかいられない、頑張らなくてはという気持ちでいっぱいでした。

#### 八 戦後の新生活、そして結婚

私は運が良かったのか、小学校・女学校時代の親友を空襲などで一人も亡くすことなく再会がで

きたことに感謝しました。しばらくすると、さらにまた運が向いて、知り合いの人から誘いをいただき、銀座にあった生命保険会社の和文タイピストに採用されました。ここで約半年ぐらい勤務していたところ、女学校時代に習っていた算盤塾の先生から、「自分が今勤めている、築地魚河岸にある卸売り会社にタイピストとして迎えたいが、来てくれないか」というお話を頂戴しました。義理ある方からのお話でもあり、そのうえ私の出生地の近くに勤務できることでもあるので、喜んでお受けすることにしました。統制経済から自由経済への移行期にあたり、関係官庁等に各種の正式書類を提出するにはタイプアップしたものが必要でしたし、なおかつ、GHQに提出する種類は英文で打たなければならなかったので、仕事は大変に忙しいことでした。給料は以前勤めていた保険会社より数段良く、仕事もやりがいのあることでしたので、楽しく働きました。ただ、市場の中の魚臭さには参ってしまい、ハンカチで鼻を押さえ

ながら事務所に通ったものでした。

仕事量がだんだんと多くなったので、タイプを打てる人がもっと欲しいという会社の意向があり、北京時代からの親友であった仲良し三人組の小沢さんと岡田さんにお話したところ、二人共喜んで入社してくれました。ここでもまた、仲良し三人組は会社の人気者になりました。終戦直後のこの時期、世間には物資特に食べ物はまだ不足していて、配給の行列が至る所で見られました。私たちは会社から魚をふんだんに頂くことができ、家族は大変喜んでいました。大正十三年の子年生まれは、口に福があるとよく言われますが、全くそのとおりで、お陰で私自身いつの時代も食べることは苦勞をしたことがありませんでした。

この会社で、主人の畑中英雄と知り合い、昭和二十三年六月に社内結婚第一号となりました。主人は大正十一年生まれで私より二歳年上でしたが、大学で教鞭を執っていた父親と、そして母親をも戦前に既に亡くしておりました。大学在学中に近

衛騎兵として応召されて、仏領インドシナからスマトラを転戦し、終戦をスマトラ島のタルトンで迎え復員してきた人でした。近衛騎兵であったことに大きなプライドを持っていましたが、両親を早くに亡くしていたため、とても家族思いの優しい人で、私の母親のことを私以上にとても大切にしてくれたことには感謝しております。そのような優しい性格であったから、私の友人との付き合いにも多大の理解を示してくれて、協力をしてくれたことにも感謝しております。

当初は間借りの新婚生活、共稼ぎのスタートでした。世の中の人がみな同じような生活でしたので、何とも思いませんでした。それというのも、共稼ぎの二人の給料はそれぞれ世間並み以上で、魚などの配給もあり、とても楽な生活ができていたからです。間もなく私は妊娠しましたので、会社を辞めました。翌年の昭和二十四年に長女かほりが生まれました。その直後に、会社の社宅が東京の一等地である千代田区平河町にできたので、

そこに入居しました。ここに小沢さん、岡田さんも入居して来ました。そして、二十七年には長男聡が生まれ、平凡ですが家族四人の幸せな生活を送ることができました。

小沢さん、岡田さんは、私の二人の子供をとてもかわいがって、よく負ぶってくれたりして面倒を見てくれました。会社への出勤前そして帰宅時には必ず立ち寄り、あやしてくれました。子供たちも、とてもなついておりました。これも、私たちが北京で十六歳ころに出会ってからの、変わらぬ友情の賜物であったと思います。その後、二人共お見合いで良い人を得て結婚をし、新しい生活をスタートしました。

#### 九 「美和の集い」の立ち上げ

昭和二十五年になり、生活も落ち着き心にも余裕ができたので、小沢さん、岡田さんと話し合い、北京で別れ別れになったまま日本の各地へ帰って行った浄書室の先輩、友人を探し出すことを始めました。北京にいるときに予定する帰郷先

をある程度聞いていた人ばかりではないため、記憶していた出身県の県庁に手紙を書き、町名と名前から探しあてたりもしました。一番図々しかったのは、アメリカの軍政下にあった琉球政府の総務部宛に理由を書き、住所が那覇市しか分からぬ先輩姉妹を探し出したこともありました。その結果、百人以上の消息を調べ上げることができて、早速「美和の集い」という親睦会を立ち上げました。美和という名前は、北京にあった華北交通の女性独身寮の「美和寮」の名前からとったものです。私は両親、兄夫婦と一緒に社宅に住んでいたので、美和寮には入っていませんでしたが、美和寮に多くの女性が住んでいたので、懐かしいであろうとこの名前を今の名称にしました。私と小沢さん、岡田さんで会の事務を担当することになりました。

昭和三十年ごろになると、さらに各人の生活が落ち着き始めたので、東京及び周辺に在住の人々とは年に一度、新宿御苑に家族と共に弁当を持ち

寄って集まり、昔話に花を咲かせ楽しい一日を過ごすことにしました。このようなときにも、主人は率先して皆が連れて来た子供たちを遊ばせてくれ、一緒に楽しんでくれました。そのうちに、だれからともなく「全国に散らばっている人たちとも会いたい」という声上がり、その準備に掛かり始めました。しかし、昭和三十二年に母が他界し、悲しみのあまり、しばらくは何も手に付かないほどでした。主人も自分の母親以上に思っていたので、二人の悲しみはひとしおでした。

昭和四十年から、全国大会を二年に一度実施することになりました。北は北海道、南は沖縄、そしてアメリカのサンフランシスコからも参加して下さり、楽しい二泊三日を過ごし、昔話に花を咲かせ、楽しいひとときを過ごし、次の大会の地と幹部を決めてお別れをしていました。

大会のたびに、必ずとっていいほど皆と話し合ったことは、私たちは北京という大きな都市に

いたために、引揚者といっても大変に恵まれていたのではないかといいことでした。大陸の奥地に行っていた人や、満蒙開拓団の人々など、終戦になつてから引き揚げるために、奥地から何日も何日も歩いて歩いて食べるものもなく、やっとの思いでたどり着いた人々がたくさんいたこと、そしてまたその途中で最愛の子供や家族を病氣や飢えで亡くされた人々の悲惨な体験を知り、その心中をお察しすると贅沢は言えないねと、自分たちは恵まれていたほうかもしれないねと、いつも語り合っていました。

旧華北交通は、戦後、社団法人華交互助会として親睦団体となりました。昭和五十年ごろから、私は華交互助会の理事を拝命し、その運営に携わることになりました。もちろん、私たちの「美和の集い」もその傘下の協力団体となり、会を盛り立てていきました。また、華北交通にあった楽団が、戦後楽友会として親睦団体となつていたので、新年会は合同開催をして、昔を懐かしん

でいました。このようなときも、主人は協力をしてくれ、私以上に楽友会の方々と親しくなり、楽しんでくれていました。

私と小沢さん、岡田さんで、ずっと「美和の集い」の事務局を担当していましたが、この間全国の友人たちと連絡を取りやすくするために、名簿の作成、会誌を数年に一度ずつ発行し、皆さんに喜ばれました。始めから名簿も会誌もガリ版刷りで発行していましたが、小沢さんのご主人もとても協力的で、ガリ版刷りを担当して下さいました。このようなことから、会の結束が強まっていききました。そのせいも、地方に住んでおられる人からも、いろいろな頼まれごとが多くくるようになりました。

一番多かったのは、子供が東京の大学に入るの  
で良い下宿を紹介して欲しいとか、娘が東京に就職するので安心できるアパートを紹介してもらいたいといったことが多かったのです。しかしこのような難しい依頼も、主人たちが協力してくれて、

いつも解決してくれました。さらには、長崎の先輩からは、東京で大学を卒業する知人の息子の就職先を紹介してもらえないだろうかとの依頼があったときには、主人に相談したところ専攻が一致し、優秀な学生であったので、主人の勤めている会社に就職させてあげることができました。

また、沖縄の先輩からは、夏休みに自分の娘を一カ月預かって欲しいと頼まれました。まだ本土復帰をしていないときで、「日本の生活を体験させてもらえないか」ということで、パスポートを持って来ました。見るものも聞くものもみんな珍しいらしく、質問攻めに遭いました。当時沖縄は米国ドルでしたから、「おばさん、これ何セント？」と聞かれると、「一ドルが三百六十円だから、これが九十円で、二十五セントよ」などと、一日に何回も計算したこともありました。そして、東京見物にもあちらこちら連れて行ったので、親御さんからは大変に良い経験になったと喜ばれました。このようなことができたのも、主人が「私

たち北京時代からの女性の友情が、こんなに長く続くものなのか」と感心しつつ、物心両面において最大限に協力してくれたからできたことであつたと感謝しております。その主人も、昭和五十四年に五十七歳の若さで他界しましたが、私の友人を含め、多くの方々に惜しまれ、感謝されたことは幸せでした。

#### 十 「美和の集い」の解散

三十年以上続けてきた全国大会の旅は、会員の皆さんの加齢と共に、計画・参加が難しくなり、遂には「美和の集い」自体も解散の道をたどることになってしまいました。しかし東京及び周辺の人々とは、引き続き新年会や各種の集まりは催していましたので、地方の人々からは非常に惜しむ声もありました。私も個人的な考えでは、今後も交流をしていきたいと思っています。

今日、過去を振り返ってみますと、北京時代からは六十五年以上の歳月が流れていますが、それは長かったようでもあり、あつという間に過ぎた

ようでもあり、複雑な気持ちでいっぱいです。

日本の国の激動期に、いわば海外で知り合った同世代の女性が、貴重な青春時代を共に海外で過ごし、敗戦というとてもつらい時代を体験してそれぞれが帰国し、生活を立て直してこの平和な時代に再会でき、昔と変わらぬ友情を交換できたことは、素晴らしいことでありました。生きている限り、続けていきたいと思っています。

引揚者といつても、私たちは比較的恵まれていたと思っています。しかし、この平和のために「平和の礎」となり、日本国・日本国民のために、尊い命を捧げられた多くの軍人・軍属・民間人がおられたことを、私たちは絶対に忘れることはできません。

かつて、鹿児島で全国大会をしたときに、鹿屋にある特攻隊の記念館を訪問しましたが、私たちと同一年くらいの青年が、遺書を残し片道の燃料で飛び立って行き、二度と祖国の地に戻って来ることがなかったことを思い、涙が止まらなかった



ことを思い出しました。心からの哀悼の誠を捧げたいと思います。その意味からも、私たち一人一人は与えられた残りの人生を有意義に、かつ充実した過ごし方をしたいものです。そして、子々孫々まで平和の尊さ、有り難さを語り継いでゆくことが、戦前・戦後を知っている我々の使命なのだと思います。